

北海道遺産に選定されている江差町地域文化資源の持続可能性に関する調査研究—その2

Study on the sustainability of Esashi regional cultural resources selected as Hokkaido heritage (2)

濱谷 雅弘*
Masahiro Hamaya

概要

北海道の道南に位置する江差町にある姥神大神宮は、北海道最古の神社と称されている。この神宮の例大祭である姥神大神宮渡御祭（以下、「姥神さん」と称する）は、370年以上の歴史がある道内で最も古いお祭りである。全道で最も歴史がある姥神さんも急激な少子高齢化と人口減少の進展などにより、現在のままで将来も持続できるかどうか危惧され始めている。前回の調査研究報告では、主に江差町全体の人口・世帯数動向や観光入込客動向及び13台の山車を保有する計18町内の人口動向と全町アンケートの集計結果から読み取れる現状などについて、学生達の姥神さんとの関わり（フィールドワーク）の実態も含めて報告した。今回2回目となる本研究報告では、町内別の姥神さんに対する意識と関わり方の実態等に関する全町アンケート調査結果を詳細に分析した結果について、山車を保有管理する各町内の年齢別人口の現状ともリンクさせて得られた知見と考察をまとめる。最終的には、この姥神さんという江差町の最も重要な地域文化資源の持続可能性を追求するうえで現地活動が進むべき方向性を示すことが本研究の目的である。

1. はじめに

前回の研究報告でも紹介したが江差町には、毎年8月9～11日の3日間開催される姥神さんで町中を厳かに曳き回される山車が現在も13基存在する（図1参照）。平成29年には総人口が8,000人を割り込んだ小さな町において、13基の山車を維持管理・保有する計18の町内間では、山車の町内巡行に関わり、必要とされる地域住民と子どもたちの人数にかなりの格差が生じてきている。

また、山車1基当たりの建造と装飾を施すのに1千万円単位の費用がかかるという山車を数十年数百年も維持管理・保存してきた各町内の姥神さんに対する思いや意識においても、近年は少しずつ地域格差が生まれてきているようである。このような現状について今回は一歩踏み込んだ分析と考察を実施している。

分析の柱として、各町内でも姥神さんにおける山車の町内巡行を担う地域住民の数が少ない町内の5基の山車と地域住民数で大きな隔りがある4基の山車の町内（計9町内）について比較している。基本的には、以下の項目ごとに詳細分析と考察を進めている。

①全町アンケート調査の各町内別（13基の山車保存会地域）集計結果による地域住民が少ない（計100人台）山車の所属町内（5地区）と現在でもかなり多い（500人以上）山車の所属町内（4地区）との比較と分析

②各町内の年齢階層別人口等の動向調査とそこから捉えられる現状と課題の考察

③観光入込客数と宿泊客数等の現状と課題

④姥神さんの開催・実施に関わる地元関係者の問題意識に関するヒアリング調査結果からの将来展望

⑤以上の調査・分析結果から導き出される江差町の重要な地域文化資源（＝姥神さん）の持続可能性に関する考察とまとめ

2. 姥神さんの様子

姥神さんには、江差町の総人口の4倍から5倍もの観光入込客があるという。下図1は、2019年8月の本祭1日目の下町巡行から姥神神社前に戻ってきた13基の山車の一部である。



図1 神社前に集結した山車（田村昌弘氏撮影）

3. 全町アンケートの町内別詳細分析

江差町の13基の山車を維持管理・保有している計18町内（計2,000世帯）へのアンケート調査を学生達11名と筆者とでポスティングによる配付を行い、郵送による回収という方式で平成28年4月に実施した。配付数2,000票に対する回収率は、18.2%、回収票は、合計365票（世帯）である。図2は、地域住民数が少ない町内の順にその町内が維持管理・保有する山車の名称と平成27年10月1日時点の町内人口と回収世帯数を示している。特に町内人口が100人台の5基の山車（5町内）と町内人口が500人以上とかなり多い4基の山車（計9町内）に着目して分析を行っている。

3.1 山車を保有する町内の3分類

町内人口が少なく100人台の5町（以下、「少数5山車町内」と称する）は、下図2に示す、108人の姥神町（豊年山：明治12年・1879年製作）、130人の上野町（源氏山：昭和21年・1946年製作）、135人の橋本町（聖武山：明治22年・1889年製作）、164人の津花町（楠公山：明治7年・1874年製作）、171人の愛宕町（神功山：宝暦4年・1754年製作）である。



図2 少数5山車町内の山車と回答世帯数

これに対して子どもを含む町内人口が多い500人以上もいる9町（以下、「多数4山車町内」と称する）は、下図3に示す、546人の豊川町（豊栄山：昭和63年・1988年製作）、計622人の陣屋町と海岸町の2町（松寶丸：弘化2年・1845年製作・北海道指定文化財）、計896人の新地町と円山と緑丘の3町（政宗山：平成10年・1998年製作）、計1,336人の柏町と南浜町と南が丘の3町（義公山：昭和51年・1976年製作）である。



義公山 ギコザン

【柏町・南浜町・南が丘】84世帯

図3 多数4山車町内の山車と回答世帯数

また、少数5山車町内と多数4山車町内以外の4町（以下、「中間4山車町内」と称す）は、下図4に示す、町内人口249人の本町（清正山：昭和27年・1952年製作）、297人の中歌町（蛭子山：明治44年・1911年製作）、308人の新栄町（新栄山：昭和30年・1955年製作）、396人の茂尻町（譽山：昭和6年・1931年製作）である。



図4 中間4山車町内の山車と回答世帯数

3.2 回答者の属性

3分類別の総世帯数に対する男子の回答率は、高い順から少数5山車町内：73.4%、多数4山車町内：63.0%、中間4山車町内：51.4%である。圧倒的に町内人口が少ない山車の町内では、約4/5の回答者が男子という結果となっている。これは、少数5山車町内の60歳以上の回答者が約7割を占めていることから姥神さんに対して男子は、高齢になるほど一種の危機感を持って当アンケートに協力して頂いたのではないかと推察する。3分類別の総世帯数に対する回答率を見ても最も高いのは、少数5山車町内の約18%であり、多数4山車町内の約13%より5ポイントも高くなっている。中間4山車町内もかなり低く約12%である。

図5の回答者の家族構成を見ると、全体の約4割が夫婦のみで次いで単身世帯：24.1%、夫婦+子ども：23.6%という結果となっており、この3タイプで全体の87.2%を占めており、その中でも多数4山車町内は、半数以上の54.8%に達している。公営住宅などが多く立地する地区でもあり、単身世帯も多いことが分かる。

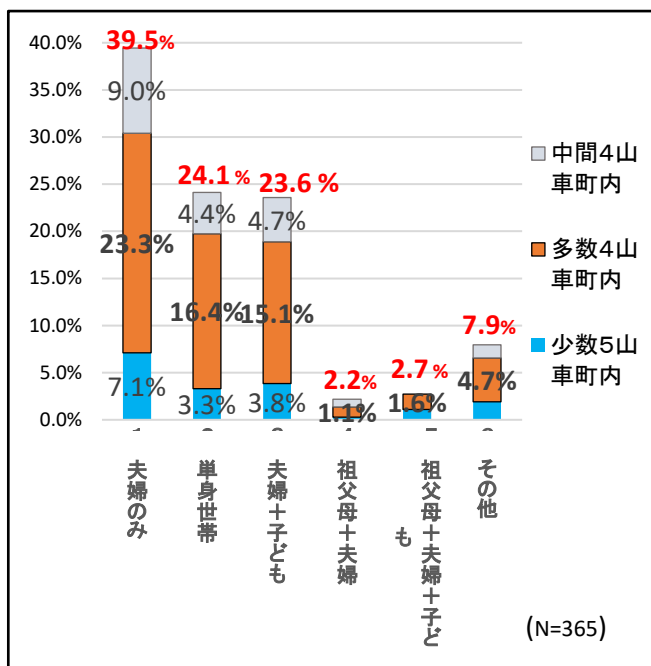


図5 回答者の家族構成

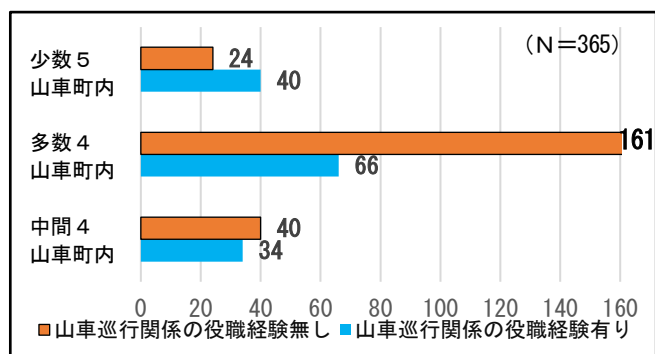


図6 役職経験の有無

属性に関する設問の最後に「山車巡行組織などで就いたことがある役職全てに○を付けて下さい」という質問に対する3分類別の回答は上図6の通りである。町内人口が多い地域の161人（回答者全体の44.1%）もの人が山車巡行に何らかの形で関わった経験が無いことが分かった。多数4山車町内の回答者:227人の内、実に71%に相当する。これは、町内人口が多いのでなかなか役目がまわってこないことと、単身者が多く住む公営住宅や社宅などが多い地域であることが影響していると考えられる。一方で少数5山車町内の役職経験無しの方は、回答者:64人の内24人で37.5%に相当し、役職経験ありの方はかなり多く、6割以上も存在する。こうした点から少数5山車町内の役職経験者の多くが本アンケートに協力してくれていたことが分かる。

3.3 期間中の帰省者と客人

右図7に示すように、多数4山車町内と少数5山車町内とでは大きく違う点が判明した。多数4山車町内

では、帰省客や客人がいないと回答した人が全体の中で最も多い13.5%にも達していたのである。この結果も多数4山車町内の回答者に単身世帯が多いことが影響しているものと考えられる。少数5山車町内の1.1%の約12倍となっている。姥神さんの期間中（毎年8月9～11日）自宅に帰省又は参加しに来る客人の多くは図7に示す通り、息子・娘夫婦と子ども、兄弟・姉妹、親戚家族、友人であり、少数5山車町内では合計:14.4%、多数4山車町内で合計:24.6%、中間4山車町内で合計:12.2%となっている。全体では51.2%でほぼ半数を占めている。

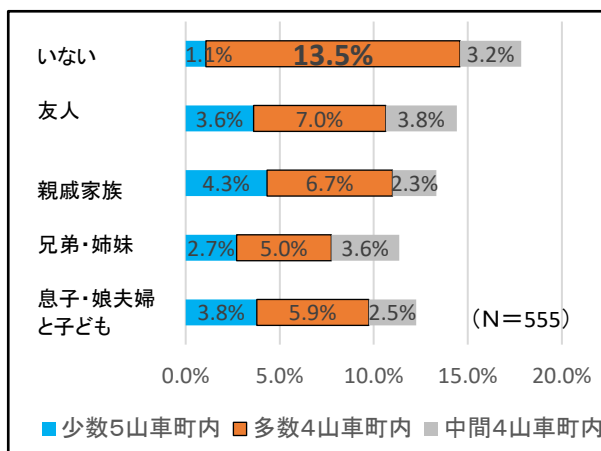


図7 毎年の帰省者と客人の状況（複数回答）

3.4 各町内の年齢構成

設問3では、町内の年齢構成の現状について回答者がどう捉えているのかについて質問してみた。結果は下図8に示すとおり、今回の調査で推察していた内容にほぼ近い結果である。少数5山車町内は、少子高齢化がかなり深刻な状況であることを証明している。

次の時代を担う中高生と20から30歳代がいないと感じている回答者（住民）が半数以上いることを真摯に受け止め、更なる現状分析を実施する必要がある。

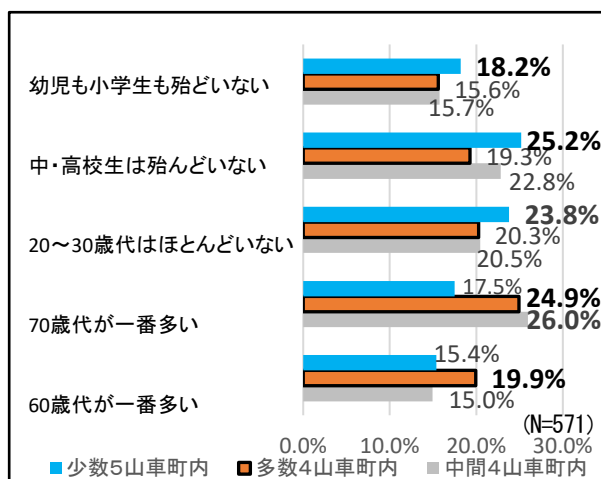


図8 3分類別年齢構成の現状（複数回答）

3.5 観光客受け入れの課題

姥神さん目的の観光客に対する町民の思いについて調査した。全体では約半数の町民が多くの観光客に来てほしいと考えているものの、来てほしいが課題があると回答した割合は、少数5山車町内で51.6%、多数4山車町内で60.8%、中間4山車町内はかなり少なく39.2%であった。下図9は、ではどんな課題があるのかについての回答結果である。

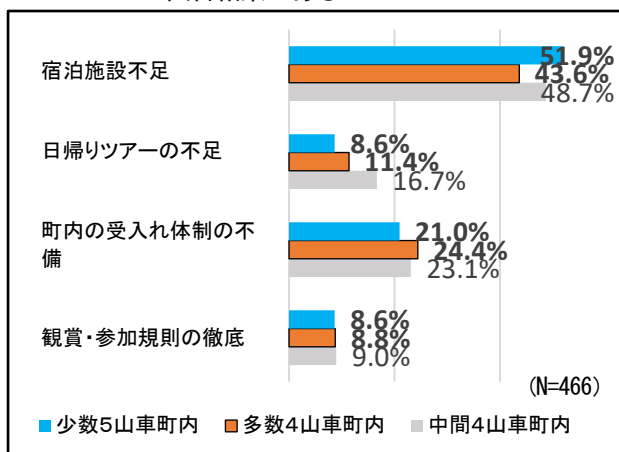


図9 観光客受け入れの課題（複数回答）

やはり、圧倒的に宿泊施設不足と回答した町民がほぼ半数を占めている。また、次に多いのが町内の受入れ体制の不備という回答であり、3分類の平均で約23%である。江差町内の宿泊施設の新設増設は実際のところかなり厳しいものがあると思う。姥神さんや江差追分全国大会などの時期には来訪者が激増するがそれ以外で宿泊客を確保できる状況にはなっていないのが現実である。多くの日帰り客への対応策を関係団体、組織は早急に構築する必要がある。

3.6 期間中のおもてなし

江差町には他の町ではなかなか体験できない「おもてなし」が姥神さんの期間中に存在する。筆者も15年前に初めて姥神さんに参加させて頂き驚愕した体験者の一人である。もちろん当時一緒に同行した学生達も同じく最初はどのようにいいのかかなり躊躇していた姿を忘れることができない。

13基の山車が厳かに巡行する下町、上町の沿道の各戸では姥神さんの期間中において地元江差人はもとより町外からの来訪者に対して、図10に示すとおりお祭り用特別料理などに飲料を添えて家族総出でもてなすのである。

ここでも少数5山車町内と多数4山車町内では大きな違いが見て取れる。少数5山車町内では、自慢の家庭料理とお祭り用特別料理でもてなすと回答した割合が61.0%もあるのに対して多数4山車町内は42.7%と

かなり少ない結果である。逆にあまり気にしていないという回答が17.6%となっている。これは、多数4山車町内の範囲が山車巡行する沿道から広範囲にわたっていることと単身世帯が多いことによるものと考えられる。

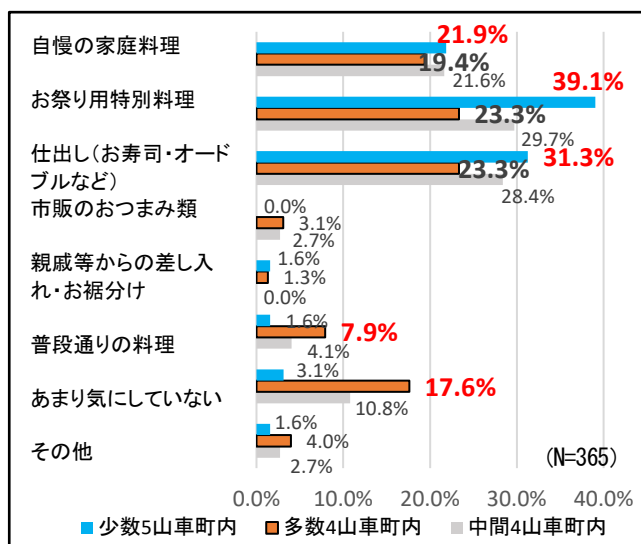


図10 期間中のおもてなし方

3.7 お祭りの現状と課題

下図11は、姥神さんの現状と課題についての回答結果である。優先順位1から3番まで記入してもらい3分類ごとにポイント化した割合をグラフ化している。

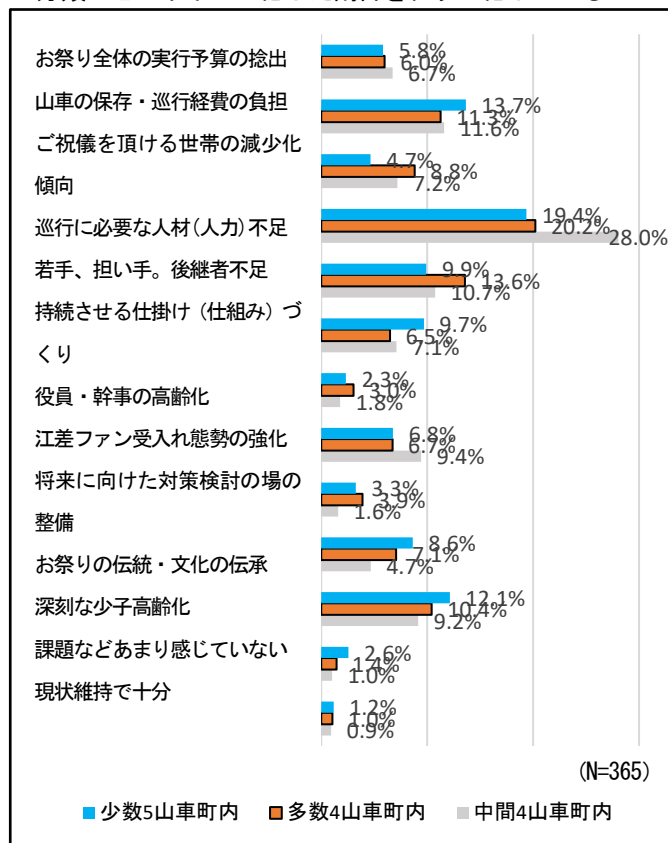


図11 お祭りの現状と課題（複数回答）

回答結果を見ると、少数 5 山車・多数 4 山車・中間 4 山車の 3 分類町内でも最も多くの町民が課題として挙げているのが巡行に必要な人材（人力）不足である。意外にも中間 4 山車町内が 28.0%にも達しており、町内人口が少ない少数 5 山車町内より深刻な事態になっている可能性があることが分かる。この点については後日詳細な裏付け調査が必要と考える。

次に高いのが山車の保存・巡行経費の負担となっている。少数 5 山車町内が最も高く 13.7%であった。3 番目に高いのが若手、担い手、後継者不足となっている。なぜか町内人口が多い多数 4 山車町内が最も高く 13.6%に達している。これは町内人口が多いからと言ってこの地域住民は必ずしも姥神さんに参加しているわけではないことを示している可能性がある。

4 番目が深刻な少子高齢化であり、少数 5 山車町内が 12.1%という最も高い結果になっている。

3.8 お祭りの将来

姥神さんの今後・将来についての設問に対する 3 分類町内の回答結果は、下図 12 のとおりである。

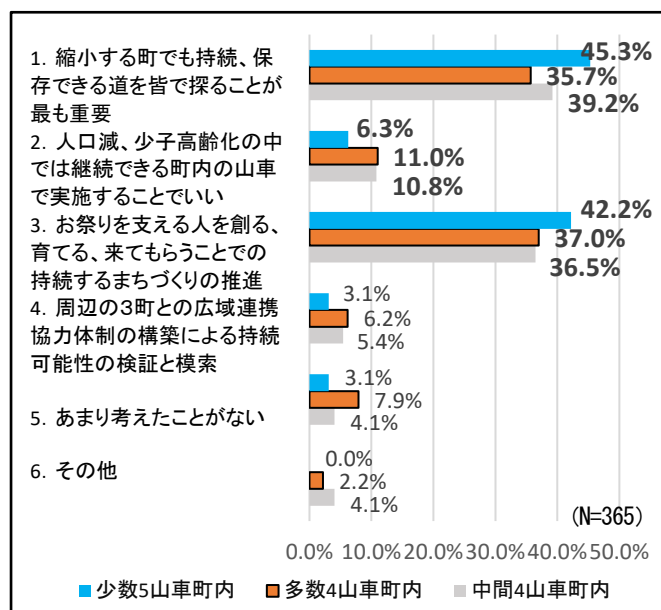


図 12 お祭りの将来への思い

3 分類とも町内人口が多い少ない関係なく、1. 縮小する町でも持続、保存できる道をみんなで探ることが最も重要という回答と 3. お祭りを支える人を創る、育てる、来てもらうことでの持続するまちづくりの推進に回答した町民が合計約 7 割から約 9 割もいるという結果となっている。

全体集計でも約 8 割もの町民が上図 12 の 1. と 3. に回答しており、江差町民は前向きに現状を理解し、姥神さんを何とか持続させていきたい、行くべきだという強い意志がこの結果から読み取れる。

3.9 新幹線開業に伴う江差観光

北海道新幹線は、平成 28 年 3 月 26 日に新青森駅から新函館北斗駅まで開通している。江差町民は新幹線の開業を観光面で活かしていくにはどのようなことが重要と考えているのかについての回答結果が下図 13 に示すとおりである。

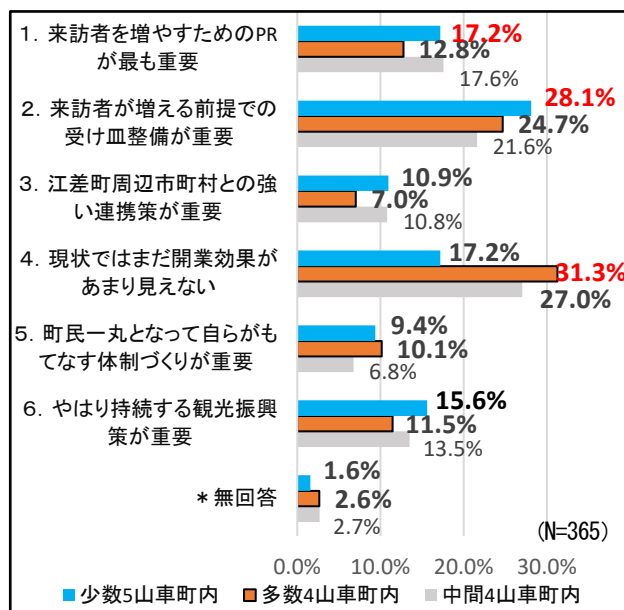


図 13 新幹線開業に伴う江差観光

少数 5 山車町内の住民は、観光客を江差町に引き込むために積極的な観光PRや受け皿整備を進めるべきとの回答が最も多い。一方で多数 4 山車町内と中間 4 山車町内の住民は、まだ開業したばかりでもあることから開業効果があまり見えないとの回答者が最も多いという結果となっている。少数 5 山車町内の住民は、新幹線開業を前向きに捉え、江差町への観光入込客の増加に対する期待が大きいと推察できる。

3.10 町外の学生や子ども達の参加

少子高齢化と人口減が進む江差町では、山車を曳く役割や山車巡行全般をサポートする役割を担う人材を確保することはどこの町内でも課題となっている。そのような状況下で 3 分類の各町内は町外からの参加についてどのような要望が強いのか聞いてみた結果が次頁図 14 である。

少数 5 山車町内及び多数 4 山車町内と中間 4 山車町内いずれも、周辺の中高生や大学生と若者に山車の巡行支援をしてほしいと願っている回答者が半数以上占めている。現地で聞き取り調査したところ、13 基の山車の前に行く神輿行列には高校生がアルバイトで参加しているとのことで、一部大学生の参加支援もあることを確認した。本学の学生チームは、神輿行列には参加せず、協定を結ぶ中歌町の蛭子山巡行に参加している。

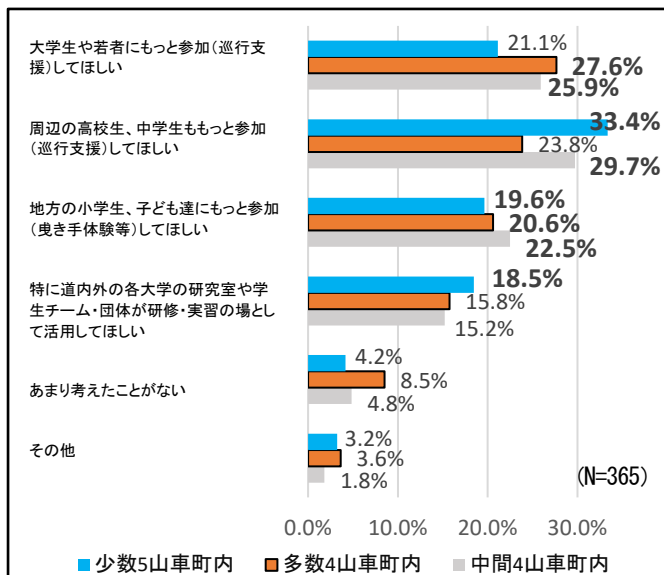


図 14 町外の学生や子ども達の参加

多数 4 山車町内が 1. の大学生や若者にもっと参加してほしいと回答した住民が 27.6%と最も高くなっており、少数 5 山車町内より 6.5 ポイントも高い結果になったことについては、再調査が必要と考える。

3.11 町民の姥神さんへの思い

最後の設問で「貴方にとって姥神さんとは？」と投げかけてみた。その結果を下図 15 に示す。

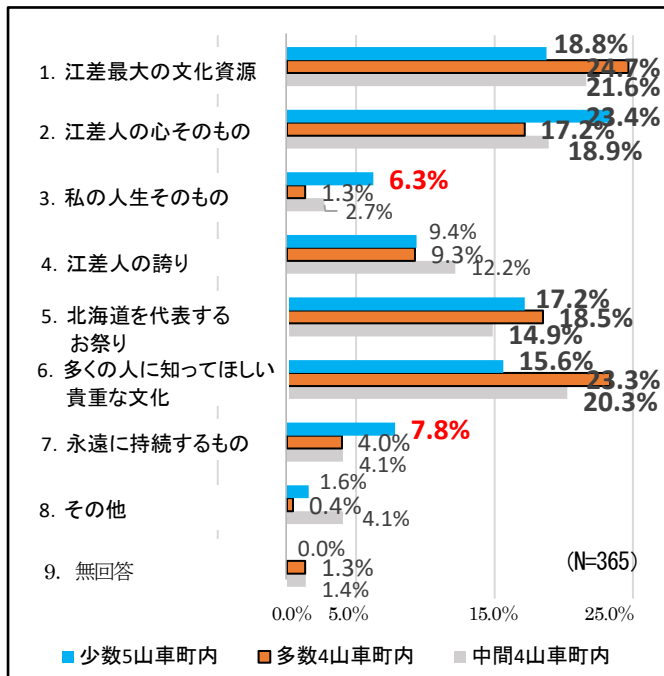


図 15 貴方にとって姥神さんとは

結果として特筆すべき点は、多数 4 山車町内の住民の 1. と 2. と 5. と 6. への回答で計 83.7%も占められていることである。少数 5 山車町内では、74.7%, 中間 4 山車町内は、75.7%で多数 4 山車町内と比較して姥神さんに対する捉え方の相違が目立つ結果となった。さらに、相違点を探ると少数 5 山車町内の住民は、

姥神さんは、2. 江差人の心そのもの : 23.4%, 3. 私の人生そのもの : 6.3%, 7. 永遠に持続するもの : 7.8% という回答結果となっており、多数 4 山車町内と比較するとかなり高い。これは 6 割以上の回答者が山車巡行の役職に就いたことがあると回答しており、役職経験者としての熱い思いが込められているものと考えられる。

以上が 3 分類 (少数 5 山車町内、多数 4 山車町内、中間 4 山車町内) による、計 13 基の山車を維持管理・保有し長年に渡って大事に保存してきている各町内の住民を対象にした姥神さんに対する意識と関わり方の実態等に関するアンケートの詳細分析と考察である。

4. 年齢階層別人口の推移と現状

3 分類別の年齢階層別人口の平成 17 年から 10 年間の推移を図 16、図 17、図 18 に示す。

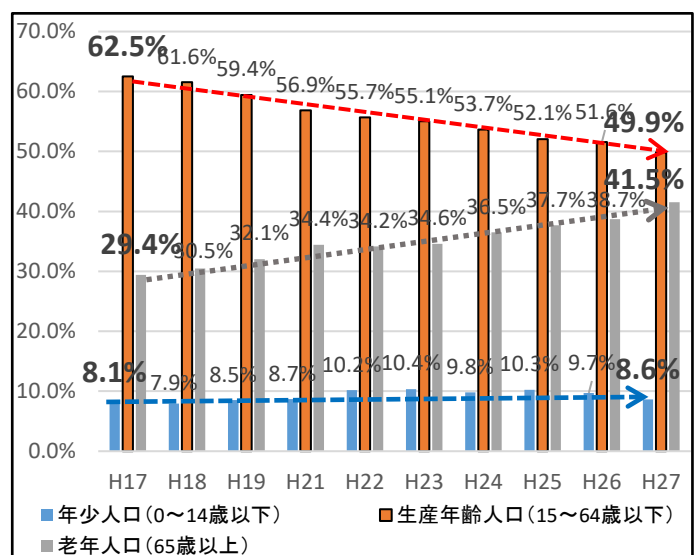


図 16 少数 5 山車町内の年齢階層別人口の推移

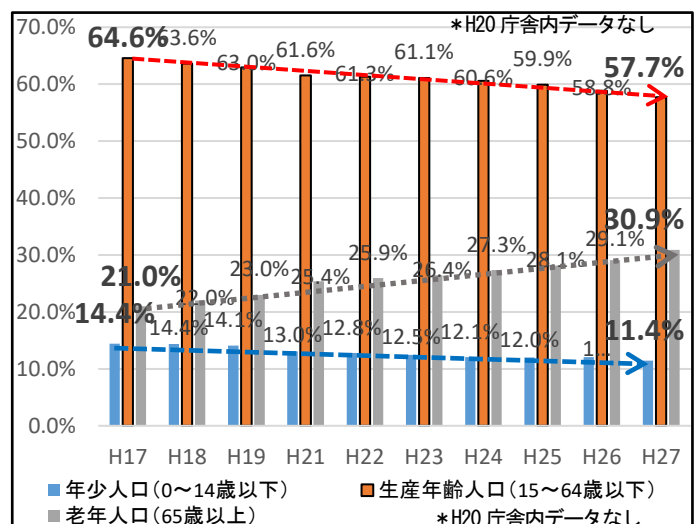


図 17 多数 4 山車町内の年齢階層別人口の推移

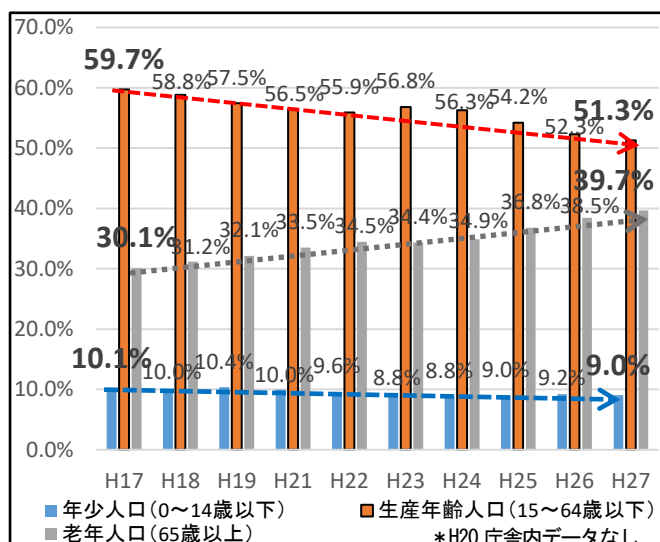


図 18 中間 4 山車町内の年齢階層別人口の推移

町内人口 3 分類のグラフを比較すると少数 5 山車町内がかなり速いスピードで高齢化が進み、山車巡行の中心となる生産年齢人口が大きく減少していることが分かる。この結果は、3.4 各町内の年齢構成の分析結果でも述べているが、少数 5 山車町内の住民は中高生も 20~30 歳代も殆どいないと回答している割合が 6 割近くにもなっていることから裏付けられる。

年少人口の構成比は、10 年間であまり変化がないように見えるがこれは全体の人口が減少してきている中での構成比であり、実数は明らかに減少傾向にあるものの生産年齢人口に比べて急激な減少ではない。

多数 4 山車町内は、若い単身世帯も多いことから少数 5 山車町内に比べて緩やかに老年人口が増加し、生産年齢人口が減少している。しかし、年少人口の構成比の減少度合い（角度）を示す線を見て分かるように地区内人口が町で最も多い地区ではあるが子どもたちの減少は急激に進んでいる。平成 17 年の年少人口から実に 300 人も減っている。多数 4 山車町内の中でも「義公山」を保有する柏町・南浜町・南が丘の減少数が最も多く平成 17 年の半分以下まで減少している。

また、中間 4 山車町内とも比較してみると、少数 5 山車町内の老年人口の増加率や生産年齢人口の減少率よりはまだ少ないものの着実に人口減少は進んでいる。老年人口は、ほぼ多数 4 山車町内の増加率と同じではあるが、実数で見ると老年人口数は殆んどここ 10 年で変わっていない。中間 4 山車町内の場合は、実数で年少人口と生産年齢人口の減少傾向が大きくこの結果に影響しているのである。

13 基の山車を保有する町内全体で見ると、老年人口の増加率は、多数 4 山車町内と中間 4 山車町内とはほぼ同じように推移している。

5. 観光入込客数の動向

江差町の年間観光入込客数を姥神さんが開催される上期（4 月から 9 月）と下期（10 月から 3 月）に分けて、平成 21 年から平成 30 年までの 10 年間の推移について調査した結果が図 19⁽¹⁾ である。

平成 21 年には上期で 353.8 千人もの観光入込客が江差町に訪れていたが、10 年後の平成 30 年には 268.5 千人まで減少している。しかし、北海道新幹線開業の効果が出たのか平成 28 年には道外入込客が急増し、前年比で 7 万人以上増加している。それに伴い道内入込客は減少化傾向にあり、平成 24 年の道内入込客数 286.3 千人をピークに平成 30 年は実に 118.6 千人まで、6 年間で 167.7 千人も減少している。

また、江差町観光の大きな特徴としては、宿泊客が大変少なく、殆どの観光入込客が日帰りであることがあげられる。年間観光入込客総数の平均 6.3%しか宿泊していないのが現状である。これは、3.5 観光客受け入れの課題でも多くの町民からあげられていたが、江差町は慢性的な宿泊施設不足に陥っており、8 月の姥神さんの時期だけは全く客室が足りない状況になる。

しかし、地域経済が活況を呈していた時期は、十数軒もの宿泊施設が存在していたとのことであるが現在の状況では旅館ホテル業は成立しないと考える。姥神さんの時期に限った臨時簡易型宿泊施設や民泊、中心街の空き家の利活用などの対策を商店街や町の観光コンベンション協会などで早急に検討する必要がある。

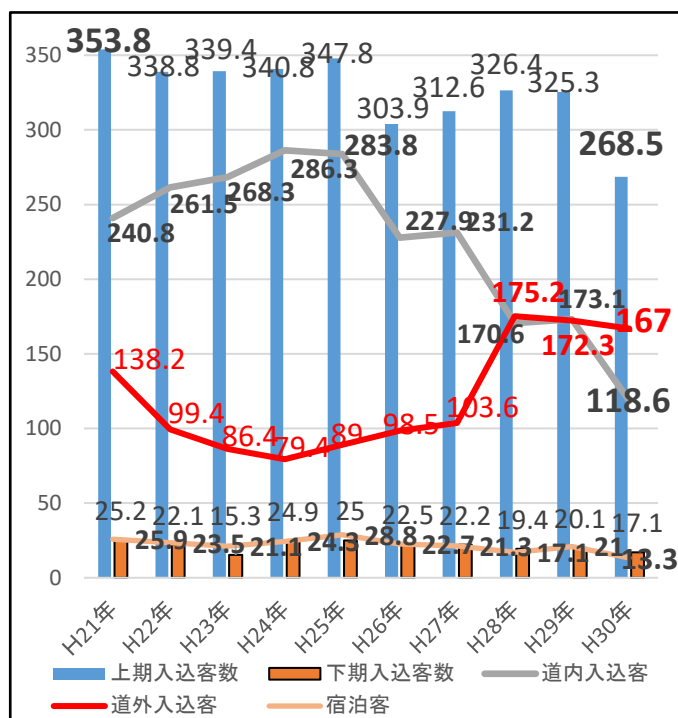


図 19 最近の観光入込客動向

6. 関係者との意見交換と考察

平成 28 年 5 月の地元山車巡行関係者へのヒアリング調査に続く第 2 段として、平成 29 年 4 月に地元関係者と意見交換を実施した。その内容を以下の項目で整理し、筆者なりにこれからの姥神さんの持続可能性について考察してみた。

6.1 現開催運営体制になるまでプロセス

姥神さんが現在の開催運営の体制になった時期は、そんなに昔のことではないそうで、まだ 30 年から 40 年ほどしか経っていないとのことである。30 歳代前に関わる山車が違う地元の数名の仲間と話し合い、これからの姥神さんはどのような方向へ進化、改善すべきか考えるために、参考になる全国のお祭りの事例を視察することから始めたそうである。当時の地元若衆チームの「もっと良い祭りにしたい」との思いで青森のねぶたをはじめ川越、佐原、高山、長崎くんちなどを視察して得た一つの改善策が山車の曳き回しに絡むことができる証としての半纏制作であった。

各町内で自分達の山車の半纏などを整備し始めたころから今の姥神さんに少しずつ近づき形が整っていき、現在の姥神大神宮祭典協賛実行委員会を中心とした管理運営システムが構築されたのである。

ここまで整備されてきたプロセスにおいては、大変な尽力を発揮して頂いた数名の親分衆＝地元名士の存在がとても大きかったそうである。

6.2 姥神さんの今後について

現在の江差町の少子高齢化と人口減少の急激な進捗状況では、姥神さん（13 基の山車巡行）を末永く持続させることはかなり厳しいものと地元の誰しもが思っているとのことであった。

意見交換を実施した相手の現在の立場について詳しくは書けないが数年前に江差人なら誰もが憧れる山車巡行の最高責任者「頭取」の経験者である。そのような方との約 2 時間の意見交換の内容をまとめると、これからの姥神さんは、各町内の山車を中心とした自分たちのお祭りという誇りから一歩踏み出す必要があるということである。

それには、姥神さんを全町的な捉え方・関わり方に持っていく方向、すなわち観に来る、参加しに来る人と共に姥神さんを大事に守り、支え合う関係性を築くことが重要になっていくものと考えている。いかにして姥神さんや関連する商品等、催しや半纏、飲食、宿泊サービス、おもてなしで来訪者にも地元消費拡大に参加協力、協賛してもらい、山車巡行の関係者＝一時江差人として動いてもらうか、ということである。

7. まとめ

平成 17 年より毎年学生達を連れて江差町の姥神さんに参加し、現在ではアクティブラーニングの教育的実践の場としての位置付けも理解して頂き、協力頂いている。特に歴まち地区「いにしえ街道」を有する旧中心商店街の中歌町（蛭子山）の顧問や相談役、頭取をはじめとした若衆との交流から生まれる 370 有余年も続くこのお祭りの背景探り（現場調査）は、毎年いろいろな話が聞けてとても興味深い。

2019 年（令和元年）で通算 15 回目の参加となる姥神さんでは、毎回意識して地元の様子や新たな語りを聴講することで持続可能性のヒントが少しずつ見えてきている。その一つが私達北科大生以外の大学生の姿が姥神さんで見られるようになってきたことがある。

その一つに 2016 年江差町と相互協力に関する協定を締結した北海道教育大学函館校の地域協働推進の取り組みがある。2016 年 8 月より毎年続けて 2019 年までの 4 回に渡り本町の山車：清正山の巡行と神輿行列に参加している。その他はこだてみらい大学や北大生チームも参加していると地元の重鎮から情報を得ている。一時期ではあるが本学建築学科の谷口ゼミ生も神輿行列に参加していた。

このように道内の大学から姥神さんに参加し、お祭りという地域文化資源の持続可能性について考える機会などが得られることは教員や学生にとって意義があると思う。しかし、世話してくれた江差人にとっては、神さんを体験した学生の一部でも江差ファンになり、社会人になっても毎年のように山車巡行に参加してくれるような展開になることを望んでいる。

また、姥神さん関係者の皆さんと議論したい持続可能性に関わるテーマも見えてきている。それは、夏休み期間に町外から姥神さんめがけて遊びに来る子ども達との交流、受け皿作りである。見たことも体験したこともないお祭りの幼児体験を通じて姥神さんの未来を開く、未来につながることになるのではないかという仮説である。姥神さんに対する強い憧れと誇り、自信と絆は、まちづくりの持続に欠かせない要素である。

参考文献

- (1) 江差町：観光客入込数，2020 年 3 月 2 日，
<https://www.hokkaido-esashi.jp/>
- (2) 江差町観光協会：江差姥神大神宮渡御祭「祭図録」，1999。
- (3) 北海道教育大学函館校：地域協働推進の取り組み，2020 年 3 月 5 日，<https://www.hokkyodai.ac.jp/>